



TITLE:

中國小說史略考證 第二十六

AUTHOR(S):

中島, 長文

CITATION:

中島, 長文. 中國小說史略考證 第二十六. 中國文學報 2008, 75: 163-194

ISSUE DATE:

2008-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/178008>

RIGHT:

中國小説史略考證 第二十六

中 島 長 文

第二十六篇 清之狹邪小説

1 唐人登科之後、以至惟所記則伶人 二五六十一

『大略』寫印本第十六篇清之狹邪小説云、唐人登科之後、多作冶游、習而不察、反成佳話、故曲中故事、文人亦往往著之篇章。其至今尚存者、有崔令欽之教坊記、孫棨之北里志、然皆綴緝瑣碎、並無條貫、清之板橋雜記、揚州畫舫錄、實其苗裔矣。宋人雜說中、今唯存李師師傳一種、專記一人、與前舉二書復別。宣和遺事中亦有李師師事、則偶然波及而已。其以記注狹邪爲全書線索者、在今所見、蓋起于清咸豐末年而泛濫于光緒末、以至宣統初年者也。

『大略』寫印本とそれ以後の『大略』鉛印本、『史略』各

版との編成上の大きな違いの一つは、「清之狹邪小説」と「清之俠義小説與公案」の章が相前後する點である。寫印本では「清之狹邪小説」は第十六篇で、「清之俠義小説與公案」は第十五篇であるが、鉛印本以降はそれが逆になる。改訂の最大の理由は、おそらく俠義小説の『兒女英雄傳』がその「雍正甲寅序」と稱するのに引かれて、狹邪小説の最初の作品『品花寶鑑』が道光の作であるのより早いと考えてのことであるだろう。鉛印本では「雍正序」を作者の假託とし、道光中の作、光緒の刊行と訂正している。

『史略』各版間の異同は、「聊遺綺懷而已」の「聊」を鉛印本が「藉」に作る他にはない。

○崔令欽『教坊記』 唐の開元天寶期の教坊に關する制度や音曲逸事を記した書。『新唐志』の經部樂類に「崔令欽教坊記一卷」と著錄され、『郡齋讀書志』の樂類にも「教坊記一卷 右唐崔令欽撰。開元中、教坊特盛、令欽記之。率鄙俗事、非有益於正樂也。」という。正樂に益がないためか、その後一旦散逸し、現在流傳するのは後世の輯本である。元の陶宗儀『說郛』收錄本が纏まったテキストとし

ては比較的早い、これは『元志』では小説家に分類され、以降『四庫全書總目』もそれを襲う。刊本には上海古典文學出版社排印本（一九五七）、また詳注を附した任二北の『教坊記箋訂』（北京中華書局・一九六二）。またその景印版である民國六十一年臺北宏業書局本）があり、日本語譯には齋藤茂譯注『教坊記・北里志』（平凡社東洋文庫・一九九二）がある。

○孫榮『北里志』 本書第十篇6および12參照。『郡齋讀書志』はじめ『直齋書錄解題』小説家類にも「北里志一卷唐學士孫榮撰。載平康俠邪事。」といい、『宋志』も小説家に入れ、共に最初から小説と考えられていた。刊本には上記『教坊記』と合訂の上海古典文學出版社排印本がある。

○梅鼎祚『青泥蓮花記』 全十二卷。漢代より明代に至る妓女にまつわる話の集大成。近刊に中州古籍出版社校注本（一九八八）がある。梅鼎祚（一五四九—一六一五）、字は禹金、號は勝樂道人、宣城の人。

○余懷『板橋雜記』 全三卷。明末南京秦淮の妓女と士人の風流冶游を追懷した書。日本でも江戸時代によく讀まれ、

和刻本がある。余懷（一六一七—一六九六？）、字は澹心、また無懷。號は曼翁。福建莆田の人。日本語譯には岩城秀夫譯注『板橋雜記・蘇州畫舫錄』（平凡社東洋文庫・一九六四）がある。

「諸處艷迹、皆有錄載」 趙景深『中國小説史略傍證』云、如揚州有李斗『揚州畫舫錄』的『小秦淮錄』等、吳門有西溪山人『吳門畫舫錄』、个中生『吳門畫舫續錄』等、珠江有支機生『珠江名花小傳』、周友良『珠江梅柳記』等、上海有玉鮓生『花園劇談』、王韜『淞濱瑣話』等。除『揚州畫舫錄』外、上引各書均收入『香艷叢書』。全集注はこれらに芬利它行者『竹西花事小錄』（揚州）、王韜『海陬冶游錄』（上海）を加える。

「志異書類」 「志異の書」とは狭い意味ではふつう志怪に近いものを指すと考えられるが、ここは小説一般を言ったものだろう。『四庫全書總目』では『教坊記』も『青泥蓮花記』、『板橋雜記』もともに小説家類に著録している。

2 明代雖有教坊、以至（第二十九回）

二五六十九

『大略』寫印本第十六篇清之狹邪小說云、清代士大夫挾妓有禁、然不云禁招優人、故達官名士、多因規避禁令、漸致伶人以侑酒、已而彌益猥劣、謂之像姑、流品比於娼女矣。『品花寶鑑』者出於道光末年、共六十回、即以敘述北京優人爲專職、以爲伶人有邪正、狎客亦有雅俗、故所描寫雖多側艷之事、亦雜鄙倍之辭、自謂並陳嫵以見邪正、實則與凡有穢書託辭於勸懲者同科而已。

『品花寶鑑』寫名士與名伶、與才子佳人無別、此殆當時習俗、著者染而不知、故肇究世變、固足爲強有力之資材、而繩以人情、則茂疑當時人士、皆得狂疾、展觀生厭、無當于藝文矣。(中略。省略部分見於本篇3所引)

却說琴言到梅宅……走到子玉房裏、見簾□不捲、几案生塵、一張小楠木床掛了輕綃帳。雲兒先把帳子掀開、叫聲少爺、琴言來看你了。子玉正在夢中、模々糊々應了兩聲。琴言就坐在床沿、見那子玉面龐黃變、憔悴不堪。琴言湊在枕邊、低低叫了一聲、不覺淚湧下來、滴在子玉的臉上、祇見子玉忽然呵々一笑道、

七月七日長生殿、夜半無人私語時。

中國小說史略考證 第二十六(中島)

子玉吟了之後、又接連笑了兩笑。琴言看他夢魔爲此十分難忍、在子玉身上掀了兩掀、因想夫人在外、不好高叫、改口叫聲少爺。子玉……一時難醒、又見他大笑一會、又吟道、

我道是黃泉碧落兩難尋。

詞罷、翻身向內睡着。琴言看他昏到如此、淚越多了。

『史略』各版間の異同 『大略』鉛印本は「描粧兒女之書」の「粧」字を「寫」字に作る。「見簾幃不卷」の「卷」字、異體字だが三十八年版全集まですべて「捲」に作る。「二張小楠木牀掛了輕綃帳」の「掛」字、『大略』寫印本、合訂再版から第十一版まで「掛」字に誤る。「琴言見他夢魔如此」の「見」字、『大略』寫印本から第十一版まですべて「看」に作り、三十八年版全集以後現行本に至るまで皆「見」に改めるが、魯迅の據った版本が如何なるものであったか分からない以上、輕々に改めるべきではない。

『小説的歴史的變遷』第六講清小説之四派及其末流云、三、人情派 (中略)『紅樓夢』而後、續作極多。『後紅樓夢』、

『續紅樓夢』、『紅樓後夢』、『紅樓復夢』、『紅樓補夢』、『紅樓重夢』、『紅樓幻夢』、『紅樓圓夢』……大概是補其缺陷、結以團圓。直到道光中、『紅樓夢』才談厭了。但要敘常人之家、則佳人又少、事故不多、于是便用了『紅樓夢』的筆調、去寫優伶和妓女之事情、場面爲之一變。這有『品花寶鑑』、『青樓夢』可作代表。『品花寶鑑』是專敘乾隆以來北京底優伶的。其中人物雖與『紅樓夢』不同、而仍以纏綿爲主、所描寫的伶人與狎客、也和佳人與才子差不多。

『品花寶鑑』刊行的時期 『史略』是「刻于咸豐二年（一八五二）」とするが、これより早く道光二十九年（一八四九）刊本が存在し、これが原刊本だと考えられる。魯迅は楊懋建の『夢華瑣簿』の記述「壬子」（本篇3所引）によってそのように推定したのである。しかし魯迅の死後であるが、周作人に『史略』の闕を補う考證がある。

周作人「品花寶鑑」（書房一角）云、從市場得趙景深君著『小說戲曲新考』、卷上有「品花寶鑑」考證、說及著作年代、根據楊掌生『夢華瑣簿』的記錄、云『品花寶鑑』的前三十回成於道光十七年、後三十回補足於道光二十九年、也

就是十二年後全書方纔告成、刊印的年代是咸豐二年。案此處所舉年歲稍有錯誤。寒齋藏有一部、書係原刻、題葉後有長方框、隸書三行云、戊申年十月幻中了幻齋開雕、己酉六月工竣。是即道光二十八年至二十九年。『夢華瑣簿』原文在丁酉年記事下註云、『品花寶鑑』是年僅成前三十回、及己酉少逸游廣西歸京、足成六十卷、余壬子乃見其刊本。此書蓋實刊成於道光己酉、而楊掌生見到時乃在咸豐壬子、本是兩件事、非見書時即刊印時也。又云丁酉年先成三十回、與陳少逸自序校對、亦略有不合。自序言某年秋後着手、是年有順天鄉試、可知是道光丁酉、兩月間得十五卷、明年往粵西、稿置敝簾中八年之久、及後北返、自粵至楚舟行七十日、又寫得十五卷、是年應順天鄉試、當丁未、故前三十回之成前後蓋十年、不得云成於丁酉也。後三十回則在道光丁未年臘底續寫、五閱月而成、已是戊申的夏天、到冬天付刊、次年畢工、是很近情理的事。序中不記干支、但據所說兩次在京應秋試的事實來考查、丁酉丁未均適合、可知上文所推算的大旨是不錯的了。寫到這裡、想起孫子書君的『中國通俗小說書目』來、查卷四中『品花寶鑑』項下註曰、存、清

咸豐刊本未見、光緒己酉刊本、半葉八行、行二十二字。原來這裏也爲楊掌生所誤、以爲原刊是咸豐間的、無怪其見不到了、因爲壓根兒就沒有這麼一回事、沒有料到這己酉年的八行本即是原刊、硬把他退下一甲子去、說他是光緒己酉年的翻本。其實光緒並無己酉、那時已是宣統元年了。還有一層、戊申己酉年本明明寫著幻中了幻齋開雕、假如該齋初刊於壬子、到己酉重刊、這其間已經隔了五十七年、幻中了幻居士在初刊時如年正二十、至此也已是七十八歲了、恐怕難得再有刻書的雅興吧。小說新考與書目二者都是專門著述、而於此點皆不免有小錯誤、可見人言之難以憑信也。

周作人は刊行時期の誤りは要するに『夢華瑣簿』の読み違ひから來る錯誤だとする。のち柳存仁はロンドンの大英博物館で、扉に「戊申年十月幻中了幻齋開雕、己酉年四月工竣」とある刊本を見て『夢華瑣簿』の記述についても周作人と同じ考えを述べている。（倫敦所見中國小說書目提要）・題記一九六二・書目文獻出版社版一九八二）又柳氏は「論近人研究中國小說之得失」の中の「品花寶鑑の成書時代」でも同じ考證を繰り返している（『和風堂文集』下卷

上海古籍出版社）。趙氏は周作人の指摘を受けてと思われるが『中國小說叢考』（一九八〇・齊魯書社）に收録した「品花寶鑑考證」では道光二十九年刊行に改めている。また『傍證』もそれを襲つて同意見である。孫楷第『中國通俗小說書目』もののちの改版（一九五八・作家出版社）では「道光己酉刊本。半葉八行、行二十二字」とするが、「清咸豐間刊本。未見」の文字は削っていない。柳氏が「己酉年四月工竣」とするのはたぶん筆誤であらう。

『品花寶鑑』の版本『日記』にも『魯迅藏書目錄』にも著録はない。『史略』の引用書の中でもこの書ほど通行する版本との異同が激しいものではなく、魯迅の使用した版本は未詳である。周作人の記述からすれば、魯迅が見たのは周作人所藏本ではなく、封面の裏に出版者の記録がないことはむろん、陳少逸の自序もないテキストであったことは疑いない。對校に使用した書は道光己酉本（古本小說集成本）、清刊京大文學部藏本、清刊神外大藏本、清末鉛印國會藏本、宣統刊東文研藏本だが、そのいずれとも符合せず、夥しい異同がある。むしろ對校使用の各本間にはそれほど

の異同はなく共通した點のほうが多い。あまりに多いので異同は一一擧げない。また今村注（學研本『史略』）でも清刊東大文藏本、清刊東洋文庫藏二本とも合わないと言う。道光己酉本以降、清末だけでもかなりの版本があるようで、『怡情佚史』（これは作品の中で又の名として出る）、『燕京評花錄』などと書名を變えて刊行されたものもある。近刊には上海古籍出版社排印本（一九九〇）や人民中國出版社排印本（一九九三）、又古本小説集成本等がある。

3 『品花寶鑑』中人物、以至（楊懋建『夢華瑣簿』）

二五七—三

『大略』寫印本第十六篇清之狹邪小説云、書中人物除梅子玉杜琴言而外、大抵實有其人、隱藏姓名、推之可得、其曰高品者、即作者自寓、乃常州人陳森書也。

『史略』各版間の異同。括弧の中の「作者手稿之『梅花夢傳奇』上、自署毘陵陳森、則「書」字或誤衍」は第十版で追加されたもので、それまでの版にはない。他に異同なし。與増田涉書信340108云、（前略）御質問に對しては解答を

添へて送^マりかへます。又、改正したい處があるから一所に送ります。（中略）中國小説史略 第三三四頁三行、「實爲常州人陳森書」の下に（括弧を加へて）左の様な四句を入れる：（作者原稿の『梅花夢傳奇』には「毘陵陳森」と自署しているから、この「書」字は餘計の字かも知れない。）

増田譯本には「魯迅氏の注意によつて譯者附記」（四四三頁）と注して魯迅の指示をそのまま載せている。

『魯迅藏書目錄』集部曲類云、梅花夢傳奇 二卷十八齣 清陳森撰 民國十年（一九二一）詩奩影印原稿本 二冊 第一冊有「魯迅」印

『日記』一九三三年三月八日云、午後往漢文淵買『四洪年譜』一部四本、二元。陳森『梅花夢』一部二本八角。（書帳も同じ）

與臺靜農書信320815云、年來伏處牖下、於小説史事、已不經意、故遂毫無新得。上月得石印『梅花夢』一部兩本、爲毘陵陳森所作、此人亦即作『品花寶鑑』者、『小説史略』誤作陳森書、衍「書」字、希講授時改正。此外又有

本刻『梅花夢傳奇』、似張姓者所爲、非一書也。

魯迅が『品花寶鑑』の著者を「陳森書」と誤ったのは、蔣瑞藻『小説考證』卷八『邨羅延室筆記』の「高品者、即陳森書、常州名士、即作品花寶鑑者。」という記述によるだろう。張姓の作の別本『梅花夢傳奇』は樽本照雄『清末民初小説目錄』に「梅花夢 二卷二冊 張道 光緒十年」と著録するものであろう。いま國立國會圖書館が所藏する光緒十年成都龔氏刊本二冊は、序では汪純菴の作と言い、その贅言では一説に汪純菴、又一説では廣漢の張某の作だと言う。あるいは魯迅の言う張姓の別本か。いずれにしろ、これは十六齣で、陳森の作（未見）とはちがう。

『小説舊聞鈔』『品花寶鑑』引『夢華瑣簿』云、常州陳少逸『品花寶鑑』、用小説演義體、凡六十回。此體自元人『水滸傳』、『西游記』始、繼之以『三國志演義』、至今家弦戶誦、蓋以其通俗易曉、市井細人多樂之。又得金聖歎諸人爲野狐教主、以之論禪悅、論文法、張皇揚詡、耳食者幾奉爲金科玉律矣。『紅樓夢石頭記』出、蓋脫窠臼、別闢蹊徑、以小李將軍金碧山水樓臺樹石人物之筆、描寫閨房兒女喁喁

私語、繪影繪聲、如見其人、如聞其語。『竹枝詞』所云、「閒談不說『紅樓夢』、縱讀詩書也枉然。」記一時風氣、非眞有所不足於此書也。余自幼酷嗜『紅樓夢』、寢饋以之。十六七歲時、每有所見、記於別紙、積日既久、遂得二千餘籤、擬汰而記之、更爲補苴掇拾、葺成『紅樓夢注』、凡朝章國典之外、一切鄙言瑣事、與是書關涉者、悉匯而記之、不賢者識其小者、似不無小補焉。其禪悅文法、託諸空言、概在所屏、似與耳食者不同。今勿勿十餘年、未能脫稿、殊自慚也。嘉慶間、新出『鏡花緣』一書、『韻鶴軒筆談』亟稱之、推許過當、余獨竊不謂然。作者自命爲博物君子、不惜癩祭填寫、是何不徑作類書、而必爲小說耶？卽如放榜謁師之日、百人羣飲、行令糾酒、乃至累三四卷不能畢其一日之事、閱者昏昏欲睡矣。作者猶津津有味、何其不憚煩也？『紅樓夢』敘述兒女子事、眞天地間不可無一不可有二之作。陳君乃師其意而變其體、爲諸伶人寫照、吾每謂文人以擇題爲第一義、正謂此也。正如『金瓶梅』極力摸繪市井小人、『紅樓夢』反其意而師之、極力摸繪閨閣大家、如積薪然、後來者居上矣。顧余有私見、欲獻而商之者、『寶鑑』中所

稱士大夫、我輩爲尊親賢者諱、禮固宜之。至其中小人如奚老土之類、夫也不良、歌以諱之、不忍斥言、亦忠厚之至。

獨杜琴言等十伶官、亦別立名目、此大不必。若輩方幸得附驥尾而名益顯、奈何忍使湮沒弗彰乎？桐仙爲余言、杜琴言即桐仙也、書中推爲第一、未知信否？其十人者、曰杜琴言、

袁寶珠、蘇蕙芳、陸素蘭、金漱芳、林春喜、李玉林、王蘭保、桂保、秦琪官。十人者皆不知何所指、不能求其人以實

之。素蘭、春喜、玉林雖有其人、皆與此書所述不稱、必別有所謂也。余丁酉夏從嚴州友吳立臣（達）案頭見之、追欲

借抄、未得其便。聞季卿言、少逸館內城一尙書郎家、咫尺天涯、未能一握手爲笑、殊恨無緣。暇日作尺一書致少逸、

述鄙見質之、方把筆而難作、書未及達也。立臣亦緣事論城旦。所謂『品花寶鑑』者、不知落誰何人之手、或者如歐公

文、有蛟龍妬且護之耶？（『寶鑑』是年僅成前三十回。及己酉、少逸游廣西歸京、乃足成六十卷。余壬子乃見其刊本。戊辰九月、

掌生記。）

【魯迅】案、少逸、名森、見所作『梅花夢傳奇』、今有手稿影印本。

楊掌生『夢華瑣簿』は、『魯迅藏書目錄』に著録はないが、民國六年上海掃葉山房石印本『清人說舊』二集所收本がある。また張次溪編『清代燕都梨園史料』（民國二十三年北平邃雅齋書店・一九八八年中國戲劇出版社）收録があり、楊懋建の傳記も附録される。

與胡適書信 220814 云、（前略）同文局印之有關於『品花寶鑑』考證之寶書、便中希見借一觀。

同じく胡適宛の書信 220821 に「前回承借我許多書、後來又得來信。書都大略看過了、現在送還、謝謝。」とあるから、『品花寶鑑』に關する考證の寶書は確かに借り受けて

見たと考えられるが、具體的にどのような本かは未詳。胡適の日記（安徽教育出版社全集第二十九卷）には民國十一年八月十一日の條に、周作人を訪ねてご飯をご馳走になり、

魯迅とも歡談したことが記されるが、たぶんその談話中であつた話にこの件があつたのではないかと思われる。しかし

胡適の日記は魯迅のと違つて書物の貸し借りなど記さない

ので、いったい何を貸したのかは不明。ただ『史略』の記述に即せば、『大略』寫印本と鉛印本の間には「夢華瑣

簿」の援用の有無という違いがある。したがって「寶書」が「夢華瑣簿」をいうのかとも考えられないことはないが、普通これは雷瑑の編纂にかかる『清人說薈』の二集に収められたのが最初だと思われる。同文局が刊行したことを言う著録は未見なので結局未詳とするしかない。もしも「夢華瑣簿」を言うのであれば、これらの手紙がやり取りされた一九二二年八月という日時は『大略』鉛印本の成書時期に關ってくる。

4 至作者理想之結局、以至一閃不見云 二五八十六

『大略』寫印本第十六篇清之狹邪小説云、書末、則名士與名旦會于九香園、畫伶人小像爲花神、諸名士爲贊、諸伶又書諸名士長生祿位、各爲贊、皆刻石供養九香樓下。時諸伶已脫梨園、乃「當着衆名士之前」、鎔化銀鈿、焚棄衣裙、將盡時、「忽然一陣香風、將那灰燼吹上半空、飄飄點點、映着一輪紅日、像無數的花朵與蝴蝶飛舞、金迷紙醉、香氣撲鼻、越旋越高、到了半天、成了萬點金光、一閃不見。」

『史略』各版間の異同 第十一版が「諸名士爲贊」の

「士」を「土」と誤り、「各爲贊」の「各」を三十八年版全集と共に「公」に誤る。三十八年版全集は「釵鈿」を「釵細」に、「灰燼」を「灰爐」に誤る。なお第六十回の引用文は第二十九回と違い現行諸本との間に異同はない。

5 其後『花月痕』十六卷五十二回、以至尤爲通篇蕪累矣 二五八一—二

『大略』寫印本第十六篇云、此外有雖不全寫倡家、而頗復相關者、爲花月痕五十二回、題眠鶴主人編次。記韋癡珠韓荷生皆雋才碩學、出入狹邪、各有眷愛、其後韋與所眷伎俱抑鬱困窮、死于寂寞、而韓獨以功名顯。上半部填塞詩歌、入後又雜以妖異、事多違實、殊非佳書。卷首符兆綸評語之、「詞賦名家卻非說部當行、其淋漓盡致處、亦是從詞賦中發洩出來、哀感頑豔」、蓋切中其失矣。書有咸豐戊午（八年）序、而行世乃在光緒時。眠鶴主人者即閩縣魏子安、少游四方、喜治游、好作詩詞駢儷、中年以後改治程朱之學、又不忍棄去舊作、遂悉納之小說中爲花月痕也。

寫印本のこの記述は、『大略』鉛印本以下と違い、『孽海

「花」と併せて『青樓夢』の後、第十六篇の最後に置かれて
いる。

『史略』各版間の異同 句讀點の違いを除いて異同はない。
眠鶴主人「花月痕」序云、夫天下之事、是與非二者而已。
天下之勢、離與合二者而已。其事而是焉者、委曲以求其是
可也。其勢而合焉者、輾轉以求其合可也。若夫事介在是非
之間、勢介在離合之際、孰有如韓杜韋劉之四人者乎。何言
之、當時之荷生、故儼然諸侯之上客也。參機密而握權要、
氣象胸次、涵蓋一切、以爲古有梁夫人、庶幾或一遇之、則
似乎其是也。然謂荷生當此有爲之世、遇知己之人、不思攀
龍附鳳、以成功名、而徒低首下心、戀戀若此、則似乎其非
也。癡珠亦然。觀其著述等身、名場坎珂、而文采風流傾倒
一時、意亦謂天下必有朝雲桃葉其人者、李香方芷、烏得以
微賤而少之、則似乎其是也。然謂癡珠際此時事艱虞、不自
慎重、而低首下心、戀戀若此、則似乎其非也。若夫韓杜之
合、韋劉之離、則又事之曉然共見者也。寢假化癡珠爲荷生、
而有經略之贈金、中朝之保薦、氣勢赫奕、則秋痕未嘗不可
合。寢假化荷生爲癡珠、而無柳巷之金屋、雁門關之馳騁、

則采秋未嘗不可離。是故爲采秋秋痕易、而爲荷生癡珠難。

作者有見及此、於是放大光明、普照世界、而後提如椽大之
筆一一而寫之。其合也則誠淡洽無間也。其離也則誠萬萬乎
其不得已也。夫固謂天下古今之大、又必有如韋劉之離者、
而現韋劉身而爲說法也。他日者春鏡樓空、秋心院古、蒹葭
碧水、難招石上精魂、楊柳青山、徒想畫中眉媚。抑或鍾情
寄恨、畧同此日之遭逢、定知白骨黃塵、更動後人之憑弔、
是是非非、離離合合、言之者無罪、聞之者足戒已。 時咸

豐戊午暮春之望 眠鶴主人序 古本小說集成本

符兆綸「評語」云、詞賦名家却非說部當行、其淋漓盡致處、
亦是從詞賦中發洩出來。哀感頑豔、然而具此仙筆、足證情
禪、擬諸登徒好色沒交涉也。 古本小說集成本

『魯迅藏書目錄』平裝書部分文學小說云、花月痕 清魏秀
仁著 陶樂勤重編 陶益明校對 一九二三年上海梁溪圖書
館 初版 二冊

「望勿糾正」『熱風』全集第一卷云、汪原放君已經成了古
人了、他的標點和校正小說、雖然不免小謬誤、但大體是有
功于作者和讀者的。誰料流弊却無窮、一斑效顰的使手拉一

部書、你也標點、我也標點、你也作序、我也作序、他也作序、這也校改、又不肯好好的做、結果只是糟蹋了書。

『花月痕』本不必當作寶貝書、但有人要標點附印、自然是各隨各便。這書最初是木刻的、後有排印本、最後是石印、錯字很多、現在通行的多是這一種。至于新標點本、則陶樂勤君序云、『本書所取的原本、雖屬佳品、可是錯誤尚多。

余雖都加以糾正、然失驗之處、勢必難免。……』我只有錯字很多的石印本、偶然對比了第二十五回中的三四葉、便覺得還是石印本好、因為陶君子石印本的錯字多未糾正、而石印本的不錯字却多糾正了。

“釵黛直是个子虛烏有、算不得什麼。……”

這“直是个”就是“簡直是一个”之意、而糾正本却改作“真是个”、便和原意很不相同了。

“秋痕頭上包着縐帕……突見癡珠、便含笑低聲說道、

我料得你挨不上十天、其實何苦惱呢？”

“……癡珠笑道、往後再商量罷。……”

他們倆雖然都淪落、但其時却沒有什麼大悲哀、所以還都笑。而糾正本却將兩個“笑”字都改成“哭”字了。教他們一見

就哭、看眼淚似乎太不值錢、況且“含哭”也不成話。

我因此想到一種要求、就是印書本是美事、但若自己于意義不甚了然時、不可便以為是錯的、而奮然“加以糾正”、不如“過而存之”、或者倒是并不錯。

我因此又起了一個疑問、就是有些人攻擊譯本小說“看不懂”、但他們看中國人自作的舊小說、當真看得懂麼？

(一九二四年) 一月二十八日

『花月痕』の原刊とされるのは、光緒十四年閏雙笏廬刊本で『花月痕全書』十六卷五十二回。光緒十九年上海書局排印本は『花月因緣』と題し、光緒三十一年育文書局石印本は『花月痕全傳』という。民國十一年上海掃葉山房本も石印本である。ここに言う「糾正本」はすなわち『魯迅藏書目錄』に著録されるが、魯迅がそれよりまだまじだとする石印本はどちらの書店の版本か未詳。『史略』がそれに據っているのは明らかだが、こちらは『藏書目錄』に著録されない。近刊には福建人民出版社排印本(二九八二)、人民文學出版社『中國小說史料叢書』杜維沫校點本(二九八二)がある。

6 所引『花月痕』第二十五回

二五九十六

いま閩雙笏廬本（東文研雙紅堂文庫）、掃葉山房石印本（同上）、吳玉田本（古本小説集成）の三本を以て校するに、いずれとも合わない部分がある。

「再回頭已百年身」の「已」字、三本共に「是」字に作る。但しこれは原稿あるいは植字段階での魯魚の誤りの可能性がある。

「眞是做寶玉的反面鏡子」の「眞」字、吳玉田本・掃葉本は「算」字に作る。

「一僧一尼」、これは三本共に「一尼一僧」に作る。

「採蓮曲裏猜蓮子」の下「蓮」字、三本共に「憐」字に作る。

「弟再四慰解」の「慰解」二字、三本共に顛倒して

「解慰」に作る。

「叫我怎忍不來呢？」の「呢」字、三本共に「哩」字に作る。

「癡珠續成和韵詩」の「詩」字、閩本、掃葉本にはない。

對校の結果からするに、魯迅架藏の「最後の石印本」が、『史略』並びに「望勿糾正」執筆時期に近い掃葉山房本であるとは言えないし、また木刻本、排印本、石印本をもとに魯迅の校訂の手が入っているとも直ぐには言えない。育文書局石印本はいまのところ見るできない。

『史略』各版間の異同 『大略』寫印本は例文を引かない。『倒是妙玉』の「倒」字、『大略』鉛印本と初版では、上記三本と同じく「到」に作るが、合訂再版で「倒」字に作られ以後それを襲っている。亦た「便敲着案子朗吟道」の「案」字、七版まではすべて「桌」字であったのが、改訂版で始めて「案」字に變った。これも上記三本は共に「棹」字に作る。

7 長樂謝章铤『賭棋山莊詩集』、以至亦遂離而二之矣

二六〇一九

『大略』鉛印本第二十四篇清之狹邪小説云、長樂謝章铤『賭棋山莊詩集』有「題魏子安所著後」五絕三首、一爲石經考、一爲『陵南山館詩話』、一卽『花月痕』（蔣瑞藻『小説考證』

八引「雷顛筆記」、因知是書爲魏子安作。子安、福建閩縣人、早負文名、尤工駢儷、長而客游四方、所交多一時名士、亦常出入狹邪中。中年以後、乃折節治程朱之學、鄉里稱長者。晚年事事爲身後誌墓計、學行益高、而于少作詩詞、未忍割棄、于是撰『花月痕』收納之（同上引『小奢摩館勝錄』）。然其故似不盡此、」（以下與現行『史略』同）。

この部分『史略』訂正版で補足され現行の如くなった。初版から第七版までは『大略』鉛印本と殆ど變らない。ただ「因知是書」が「因知此書」となり、「子安」が「子安名未詳」となり、「早負文名」が「少負文名」となる違いだけである。

『史略』後記云、（前略）其第十六篇以下、草稿則久置案頭、時有更定、然識力儉隘、觀覽又不周洽、不特于明清小說闕略尙多、卽近時作者魏子安・韓子雲輩之名、亦緣他事相牽、未遑博訪。（後略）

與増田涉書信 340108（承本篇3所引）云、又第三「」八頁四行、「一爲陵」を「一爲陔」に改正す。（長文按：これは『小説考證』の誤りをそのまま引いたのを、『賭棋山莊全集』

を見ることで訂正した。）

又同頁六行「子安名未詳」より、九行「然其故似不盡此」まで次の如く改正す。

子安名秀仁、福建侯官人、少負文名、而年二十八始入洋、卽連舉丙午（一八四六）鄉試（鄉試に及第すれば舉人になる）、然屢應進士試不第、乃游山西、陝西、四川、終爲成都芙蓉書院院長、因亂逃歸、卒、年五十六（一八一九—一八七四）、著作滿家、而世獨傳其『花月痕』（『賭棋山莊文集』五）。秀仁寓山西時、爲太原知府保眠琴教子、所入頗豐、且多暇、而苦無聊、乃作小說、以韋癡珠自況、保偶見之、大喜、力獎其成、遂爲巨帙云（謝章铤『課餘續錄』一）。然所托似不止此。

又一四頁目錄第七行「魏子安花月痕」を「魏秀仁花月痕」に改正す。

一九三三年三月の『史略』第九版までの記述（上引『大略』鉛印本に略同）を、一九三五年六月の第十版で増田涉への指示と同様に現行の如く改められたと考えられる。ただ増田涉宛の指示では「二十八」に作っていたのが、何故か

第十一版（おそらく第十版でも）では「二十餘」に作り、五十七年版全集で増田宛書簡によって「二十八」に改められ、七十三年版全集ではそれを襲ったが、新版全集で第十版の舊に戻された。増田氏への指示は謝章铤の「魏子安墓誌銘」を見ることができたための訂正であり、「二十八」とはそこに明記してある事柄なので、五十七年版全集の措置はおそらく正しいと思われる。しかしいづれにしても注のあるべき箇所である。實際の魏秀仁の生没年は、無名氏編『魏子安先生年譜』抄本によれば嘉慶二十三年（一八一八）生、同治十一年（一八七三）没とする（人民文學出版社版杜維沫校點後記）。その後魏秀仁の三弟魏秀潛撰の『續魏氏世譜』が発見され、同治十二年没が確認されたのでそれから逆算すれば生年は嘉慶二十三年となる（二〇〇〇年江蘇古籍出版社『魏秀仁雜著鈔本』福建叢書第二輯之五）。謝章铤 新版全集注云、謝章铤、字枚如、清長樂人、官至內閣中書。撰有『賭棋山莊全集』。これは後に引く『雷填隨筆』の文末をそのまま襲ったものである。

魯迅が『賭棋山莊全集』を見ることができたのは一九三三

年十二月二十五日である。それは『史略』訂正の時期とも一致する。その日の日記には「午後托廣平往中國書店買『賭棋山莊全集』一部卅二本、十六元。」とある。又『藏書目錄』叢書部自著類には「『賭棋山莊全集』十六種 清謝章铤著 清光緒十年（一八八四）至三十八年（一九〇二）南昌及福州刻本 三十二冊 有像」と著録する。

雷瑠『雷填隨筆』云、「花月痕」小説、筆墨哀豔淒婉、爲近代說部中之上乘禪。惜後半所述妖亂事、近於蛇足、不免白璧微瑕。書中韋癡珠、或言影李次青、然事跡殊不合。韓荷生、或謂卽左宗棠、雖有相似處、亦未能畢肖。要之小説結構、大都眞僞難糅、虛實互用、興之所之、自爾成文、固不必膠柱鼓瑟以求也。相傳著者爲江南名士、游幕秦中、主人某大守、擁宦囊極豐、又耽於聲色、慕名士詩才、延之幕中。命侍姬及女公子輩、從之學詩。然每日祇授課一二小時、且亦有數日不至書室者。故名士從容吟讌、頗有餘閑。星晚露初、客懷寂寞、則往往譚小説以自遣、命名曰『花月痕』。書成及半、太守偶至書房、無意中翻檢得之、讀而狂喜、促名士速竣其事。謂成書一卷、立贈五十金、并盛筵一席。蓋

知名士性落拓、不如是、恐半途而廢、永無殺青時也。名士

勉從所請、不半年而書成。有人憫之南中、不及鏤版、即以鉛字印行。流傳甚廣、文士多喜閱之。所謂某名士者、究爲何人。初時無從考索。嗣讀謝枚如「題魏子安所著書後五絕三首」、一爲「石經考」、一爲「^マ陵南山館詩話」、一爲「花月痕」小說也。前二種不備錄、第三首云、「有淚無地灑、都附管城子。醇酒與婦人、末路乃如此。獨抱一片心、不生亦不死。」又「哭子安」第二首云、「憂樂兼家國、千夫氣不如。亂離垂死地、功罪敢言書。將母情初盡、還山願竟虛。幽光終待發、試看百年餘。」自注、子安客川陝十數年、身經喪亂、其「咄咄錄」「詩話」等書、皆草莽於是時。君沒時、尚在母喪、讀此數詩、知魏君著作甚富、懷才早世。『花月痕』一書、或者寓美人香草之思、自寫其牢愁哀怨、未可知也。謝枚如名章鋌、福建長樂人、光緒丁丑進士、官內閣中書、著有賭棋山莊詩集若干卷、魏君既與同時、或亦係同光朝人云。『小說考證』卷八 一九八四年上海古籍出版社排印本 『史略』が第九版まで『陔南山館詩話』を『陔南山館詩話』と誤ったのは、『小説考證』の誤りをそのまま引き継いだ

からである。

「小奢摩館鏤錄」云、「花月痕」一書、相傳爲湘人某作、非也。蓋實出於閩縣魏子安晚年手筆。子安早歲負文名、長而游四方、所交多一時名士、喜爲狹邪游。所作詩詞駢儷、尤富麗瑰縟。中年以後、乃折節學道、治程朱學最邃。言行不苟、鄉里以長者稱、一時言程朱者宗之。晚歲則事事爲身後誌墓計、學行益高。唯時念及早歲所爲詩詞、不忍割棄、乃託名眠鶴主人、成『花月痕』說部十六卷。以前所作詩詞、盡行填入、流傳世間、即今所傳本也。子安與謝枚如章鋌同時、故卷首有枚如題詞。有人林浚南、爲枚如所最稱賞、親侍警咳、曾爲余言及此。 同上

『小説舊聞鈔』『花月痕』引『賭棋山莊文集』五「魏子安墓誌銘」云、咸豐中、予歸自永安、羸病幾死。稍間、或言曰、「魏子安至自蜀矣。」予躍然、乃就君而謁焉。君時困甚、授徒不足以自給、而意氣自若、一見如舊、蹤跡日益親。其後各饑驅奔走、不常相聚。今年春、予之漳州。君計挈家之延平、予與君約、「予幸得早歸、當買舟西上、作十日歡。」乃君解裝不及旬、而竟長往矣。悲夫！君名秀仁、字子安、

一字子敦、侯官人。父本唐、歷官教職、有重名、世所稱爲魏解元者。君其長子、盡傳其家學、而獨權奇有氣。少不利童試、年二十八、始補弟子員、卽連舉丙午鄉試。當是時、教諭君官於外、夫人持家務、諸婦佐饔飧、兄弟抱書、互相師友、家門方隆盛。君復才名四溢、傾其儕輩、當路能言之士、多折節下交、而君獨居深念、忽高視遠矚、若有不得於其意者。既累應春官不第、乃游晉、游秦、游蜀。故鄉先達、與一時能爲禍福之人、莫不愛君重君、而卒不能爲君大力。君見時事多可危、手無尺寸、言不見異、而亢髀抑鬱之氣、無所發舒、因遁爲稗官小說、託於兒女子之私、名其書曰、『花月痕』。其言絕沈痛。閱者訝之、而君初不以自明、益與爲恂悅談謔、而人終莫之測。最後主講成都之芙蓉書院。於是君年四十矣。劇賊起粵西、蹂躪湖南北、盤踞金陵、浙閩皆警、聞問累月不通。君懸目萬里、生死皆疑。既而弟殉難、既而父棄養。欲歸無路、仰天椎胸、不自存濟。而蜀寇蠢動。焚掠慘酷、資裝俱盡。挾其殘書稚妾、寄命一舟、偵東伺西、與賊上下。君憤廉恥之不立、刑賞之不平、吏治之壞、而兵食戰守之無可恃也、乃出其聞見、指陳利弊、慎擇

而謹發之、爲『咄咄錄』。復依準邸報、博考名臣章奏、通人詩文、集爲詩話、相輔而行。君著書滿家、而此二書、爲尤不朽。蓋時務之著龜、功罪之金鑑、春秋之義、變風・變雅之旨也！後世必有取焉。然而世乃不甚傳、獨傳其『花月痕』。嗟乎、知君固亦不易耶？君既歸、益寂寞無所向、米鹽瑣碎、百憂勞心。叩門請乞、苟求一飽。又以其間修治所著書、晨抄瞑寫、汲汲顧影若不及。一年數病、頭童齒豁、而忽遭母夫人之變、形神益復支離。卒、年五十有六。葬於某山之原。君性疎直不齷齪、既數與世齟齬、乃摧方爲圓、見俗客亦謬爲恭敬、周旋惟恐不當、顧其人方出戶、君或譏誚隨之。家無隔宿糧。得錢、輒置酒歡會。窮交數輩、抵掌高論、君目光如電、聲如洪鐘、嬉笑諧謔、千人皆廢。遇素所心折者、則出其書相質證、或能指瑕蹈隙、君敬聽唯唯、退、卽篝燈點竄、不如意、則盡棄其舊。蓋其知人善下、精進不吝、有如此者！予之聞君名也、由於芑川。芑川實未見君、見所爲『荔枝詞』而善之。今芑川歿矣、君又繼之、使余以悲芑川者悲君、君如有知、能無憾耶？然君書俱在、謂非後死者之責耶？乃錄其部目、而系之銘。畀君弟若子、使

刻於石、以詔來者。

陔南石經考四卷 熹平石經遺文考一卷

正始石經遺文考一卷 開成石經校文十二卷

石經訂顧錄二卷 西蜀石經殘本一卷

北宋石經殘本一卷 南宋石經殘本一卷

洛陽漢魏石經考一卷 西安開成石經考一卷

益都石經考一卷 開封石經考一卷

臨安石經考一卷 陔南山館詩話十卷

咄咄錄四卷 蹇蹇錄二卷

彤史拾遺四卷 三朝讜論四卷

故我論詩錄二卷 論詩瑣錄二卷

丹鉛雜識四卷 榕陰雜掇二卷

湖壖閒話一卷 蠶桑瑣錄一卷

懲惡錄一卷 幕錄一卷 巴山曉音錄一卷

春明摭錄四卷 銅仙殘淚一卷

陔南山館文錄四卷 陔南山館駢體文抄一卷

陔南山館詩集二卷 碧花凝唾集二卷

銘曰、有美一人黔而豐、腰脚不健精神充。胸有鑪錘筆有風、

百鍊元氣貫當中。蚩蚩者婆醉者翁、禿烏狡兔爭西東。傍立側睨讓乃公、笑罵非慢拜非恭。大聲疾呼直不聽、著書百卷完天功。

又引謝章铤『課餘續錄』一云、子安爲魏丈又瓶（本唐）教授之長子。教授五子、次子子愉（秀才）秀才、長於禮、三子子壽（起）秀才、長於書、皆有遺著。而制作之才、子安爲最、撰述宏富、詳余所作墓誌銘。然而今之盛傳者、則在其『花月痕』小說。是時子安旅居山西、就太原知府保眠琴太守館。太守延師課子、不一人、亦不一途。課經、課史、課詩、課字畫、課騎射、下而課彈唱、課拳棒、亦皆有師、人占一時、課畢即退。子安則課詩之師也、已時登席、授五言四韻一首、命題擬一首、事畢矣。歲修三百金。以故子安多暇日。欲讀書、又苦叢雜、無聊極、乃創爲小說、以自寫照。其書中所稱韋瑩字癡珠者、卽子安也。芳草一兩回、適太守入其室、見之、大歡喜。乃與子安約、十日成一回、一回成、則張盛席、招菊部、爲先生潤筆壽。於是浸淫數十回、成巨帙焉。是『花月痕』者、乃子安花天月地、沈酣醉夢中、嘻笑怒罵、而一瀉其骯髒不平之氣者也。雖曰虞初之續、實

爲玩世之雄。子安既沒、余謂子愉曰、「『花月痕』雖小說、畢竟是才人吐屬。其中詩文、詞賦、歌曲、無一不備、且皆嫺雅、市僧大腹賈未必能解。若載之京華、懸之五都之市、落拓之京員、需次之窮臣、既無力看花、又無量飲酒、昏悶欲死、一見此書、必且破其炭敬別敬之餘囊、亂擲金錢、負之而趨矣。於是捆載而歸、爲子安刻他書、豈不妙哉！」子愉亦以爲然、遂巡未及行、其同宗或取而刻之、聞亦頗獲利市、近又聞上海已有翻本矣。子安所著書、以石經爲大宗、其『訂願錄』二卷、是爲亭林諍友。而余尤賞其『陔南詩話』十卷、附『咄咄錄』四卷、是爲庀史、必傳之作。是時子安游秦、居同鄉王文勤公節署。子安、文勤之年家子也。文勤愛重其才、招入幕府。『石經』既近在咫尺、朝夕可以摩挲、故考訂較精。節署四方文報所集、而一時名人詩文集、亦易備、子安據以成編、其中夷務、海寇、髮賊、回逆、捻匪、時政得失、無不羅列。雖傳聞異詞、而大略可以根據。惟采詩過繁、不無玉石雜糅之患。余題其後曰、「詩史一筆兼、孤憤固無兩、偏舟養羈魂、亂離憶疇曩、匪惟大事記、變風此遺響。」又哭子安句云、「憂樂兼家國、千夫氣不如、

亂離垂死地、功罪敢言書。」云々、亦爲此發也。蓋子安客川陝十餘年、身經喪亂、事多目擊、固異日金匱石渠、編摩之所不廢也。……

魏秀仁の他の著作は、その没後謝章铤の言う如く、『花月痕』を除いて刊刻の資なく抄本のまま散逸したらしく、著作のうち辛うじて『陔南山館詩話』十卷、『咄咄錄』、『碧花凝唾集』、及び沈祖牟の輯になる『陔南山館遺文』二十篇のいずれも抄本が最近になってようやく福建文史研究館によって影印出版され、直接読むことができるようになった。上記の『魏秀仁雜著抄本』二冊がそれである。これには陳慶元「魏秀仁及其雜著」という解説が附されている。

8 全書以伎女爲主題者、以至猶南面王 二六一—十七

『大略』寫印本第十六篇云、寫名士佳人而佳人爲倡女者有『青樓夢』、計六十四回、題釐峰慕眞山人者、前有光緒三十一年序、疑成書當更在前也。書言金挹香字企眞、蘇州府長洲縣人、幼卽能文、長更慧美、然「當世滔滔斯人誰與、竟使一介寒儒懷才不遇、公卿大夫、竟無一識我之人、反不

若青樓女子、竟有慧眼識英雄于未遇時也。」(本書提綱中語) 故挹香游狹邪、特受伎人愛重、然亦終撥巍科、納五妓、一妻四妾、又爲養親計、捐職仕餘杭、卽遷知府、而父母皆在府衙中跨鶴仙去、挹香亦悟道、羽化於天台山、歸家度其妻妾、於是「金氏門中、一百日兩代升天」。長子早掄元、其友人亦以挹香及引皆仙去、而往時所識三十六伎、亦一一「歸班」、緣此輩、「皆散花苑主座下司花的仙女、因爲偶觸思凡念、所以謫降紅塵、今塵緣已滿、應該再入仙班」也。據序、作者爲俞吟香、行實未詳、而其思想、則觀金挹香本末可見。所述之地爲上海、至于倡家情狀、蓋多憑理想以立言、並非當時實錄、而文思俱拙、且大遜品花寶鑑、僅足攷見清季一部份人士之懷抱而已。

「小説的歷史的變遷」第六講承本篇2所引云、「青樓夢」全書都講妓女、但情形并非寫實的、而是作者的理想。他以爲只有妓女是才子的知己、經過若干周折、便卽團圓、也仍脫不了明末的佳人才子這一派。

『史略』各版間の異同 「所寫非實」の「寫」字、『大略』鉛印本は「敘」に作るが、初版で現行に改める。(本

書題綱)の「題」字、『大略』寫印本、鉛印本共に「提」字に作る。初版で現行となり通じないこともないが、元に戻すほうがよい。なお鉛印本は「(本書『提綱』云)」と「云」字を添える。

「提綱」とはどのように銘打っているわけではないが、各回の前に附された一種の解説で、それぞれの回での描寫の意味付けを行っている。ここに引かれたのは第一回の提綱中の語で、全篇に對する總論的な役割りを果たしている。

本文中の雙行の評と共に所謂「梁溪の瀟湘館侍者」つまり鄒弢の手になるものであろう。

鄒弢「青樓夢序」云、(前略) 俞君吟香、青箱家學、黃散才華、人來消夏灣頭、家住莫釐峰下。翠艷紅香之癖、夙擅冬郎、落霞秋水之詞、堪誇王勃。(中略) 于是振紙排愁、拈毫構恨、舉生平之所歷、貢感慨之所深、發揮性情、吐茹風月。每值春窗雨霽、秋夕燈明、把酒問天、踞牀對月、裁箋一幅、聚墨十圍。蜡燭高烧、記美人之韻事、臙脂多買、描妃子之新妝。要知情淺情深、不外悲歡離合、莫願夢長夢短、無分兒女英雄。而況槁木灰心、浮雲作劇、追昔時之良

□（觀？）、成此日之相思。枕破游仙、須補情天缺陷、珠懷記事、尙留色界姻緣。慨舞衫歌扇以全非、問斷粉零脂其安在、此青樓夢之所由作也。（後略）光緒四年戊寅重九、梁溪釣徒瀟湘館侍者翰飛弟鄒弢拜敘于吳門旅次。 申報館本

『小說舊聞鈔』『青樓夢』引『三借廬筆談』四云、余幼作客、所交亦衆、惟趨炎逐熱、俱非同心、獨吟香一人可共患難。君姓僉名達、自號慕真山人、中年累於情、比來揚州夢醒、志在山林、而塵絀羈牽、遽難擺脫、甲申初夏、遽以風疾亡。著有『醉紅軒筆話』、『花間棒』、『吳中考古錄』、『閒鷗集』等書。詩亦清新不俗、『夜過青浦』云、「一櫂長驅去、篷窗興不孤、港收陳墓鎮、風送澱山湖。櫓影月扶直、船聲浪激颺、魚龍多變幻、放眼亦仙乎。」『遊磨盤山』云、「鳥道盤盤壁萬尋、支筇選勝獨登臨、寺餘半角佛猶古、徑轉三叉雲更深。夕照淡扶孤塔直、西風寒釀暮鐘沈、題詩一笑留鴻爪、要與山林證素心。」『舟次許關』云、「篷窗屈指算征郵、猶聽吳音到耳柔、分附征帆遲一夕、要留明日別蘇州。」『遨遊眞娘墓』云、「何處埋香土一抔、墓前短碣沒蒿萊、芳魂地

下曾知否、踏遍斜陽我獨來。」雜句如「晚眺」云、「一灣流水環溪曲、半角斜陽落塔尖。」「遣懷」云、「貧惹人嫌休算辱、愁須自遣不妨瞞。」「題虎邱寺壁」云、「壞塔風淒鈴語寂、荒池水激劍光浮。」「縱筆」云、「惟有癡情難學佛、獨無媚骨不如人。」五言如「山中」云、「林深酣鳥樂、山靜笑人忙。」「渡太湖」云、「勢挾魚龍壯、聲驕鷹隼呼。」「夢中得句」云、「花濃忙亂蝶、波靜穩閒鷗。」皆佳。

9 例如、以至（第六十四回）也

二六一—五

『大略』寫印本の引用 「例如」を「其文章畧如下」に作り、『大略』鉛印本以下と同様第五回、第二十一回、第六十回と同じ部分を引用する。但し繋ぎの文章はなく、「遂去」以下の最後の部分もない。そして引用文自體にも鉛印本以下とは少しく出入りがある。次にその箇所を摘記する。

第五回 「鴛鴦館主人」の「主」を「散」に作る。「第

七位……第十一位……花月娟」の部分は引かない。「末位護芳樓主人……」の「位」を「了」に作る。「今日如此盛會」の「盛」を「佳」に作る。「挹香道說……

還請你來」を引かない。「于是十二位美人俱各斟酒一

杯」を「于是十二位美人俱各斟一杯酒」に作る。「挹香一飲而盡」の「一飲」上に「俱」字あり。

第二十一回 「愛卿適發胃氣」の「氣」字なし、但しこれは鉛印本以下三十八年版全集まですべて「氣」字を缺く。

第六十回 冒頭に「挹香……」二字あり。「字拜林夢仙仲英」の「英」字を「莫」に作る。これも三十八年版全集まですべて「莫」字に作る。「代吟梅完其姻事」の「梅」を異體字「栳」に作る。「自己去置辦了……」の「置」を「帶」に作る。三十八年版全集まですべて「帶」に作る。「寄在人家」の「在」を「於」に作る。「重歸家裏」を「復回家中來」に作る。「恰巧五美俱在」の「俱」を「皆」に作る。「仍舊笑嘻嘻在着那裏」を「仍然笑吟吟的在那裏」に作る。「覺心中還有些對他們不起的念頭」の「還」字を「似」字に、「起」字を「住」字に作る。「想了一回」の句頭に「因」字あり。「既解情關」の「解」を「破」字に作

る。

第五回の引用における異同などは、筆寫の際の筆誤と考えても通ずるが、第六十回の引用は、すでに鉛印本以下とは異なるテキストに據るとしか考えようがない。しかし今のところ寫印本の據ったテキストは特定することができない。『魯迅藏書目錄』に著錄するのは上海申報館仿聚珍版印本で、第一冊に「魯迅」印ありということだが、寫印本の第六十回引用は明らかに申報館本ではない。

『史略』各版間の異同 第五回、「令官必須先飲門面杯起令、纔是」の句讀點、初版から第七版まで脱落する。第二十一回、「愛卿適發胃氣」の「氣」字、寫印本からすべてなく、五十七年版全集で補われた。第六十回、「寄與拜林夢仙仲英」の「英」字、寫印本から三十八年版全集まですべて「莫」字に作り、五十七年版全集で「英」に改められる。「自己去置辦了……」の「置」字も寫印本以來三十八年版全集まで「帶」字につくり、五十七年版全集で「置」に改める。句讀點はともかくこれら文字の違いは用いたテキストの違いからくるものかも知れず、一概に引用に際し

ての誤りだと決めつけるわけには行かない。第六十四回、「多是散花苑主坐下……」の「坐」字、鉛印本のみ「座」に作り、初版からは「坐」に作る。

『青樓夢』の版本 光緒十四年文魁堂刊本（小本）をはじめ光緒十八年圖書集成局本、二十一年上海書局石印本、錦章圖書局石印本、申報館仿聚珍版本、光緒木活字本等いくつもあり、近刊には北京大學出版社の申報館本を底本とした紅樓夢關係資料叢書本等がある。そうした中魯迅の用いた底本は特定し難い。

鉛印本以下の引用底本は、上記『藏書目錄』に著録がある以上申報館鉛印本ではないかと考えるのがふつうだが、この書の購入時期が不明である上、實際に對校してみるとやはり符合しない箇所がいくつかある。いま國會圖書館藏申報館鉛印本、古本圖書集成光緒木活字本、北京大學出版社排印本の三本による對校の結果を次に挙げる。

第一回 「求慕道」の「慕道」二字、集成本は「道德」に作る。

第五回 「鴛鴦館主人」の「主」、集成本「散」に作る。

「梅雪爭先客」の「先」、北大本「春」に作る。「美人俱各斟酒一杯」の「酒一杯」、三本みな「一杯酒」に作る。「罰酒三巨觥」の「觥」字、三本みな「觴」字に作る。「唯唯聽命」の「聽」字、國會本「從」字に作る。

第二十一回 「愛卿適發胃氣」の「氣」字、集成本、北大本共にあり。「胃氣丹方」の「丹」字、三本みな「單」に作る。

第六十回 「……心中思想道」の「思」字、三本みななし。「只得一個私自瞞了他們」の「個」下に、集成本、北大本ともに「人」字あり。「次日」國會本、北大本ともに「主意已定、到了明日便」に作り、集成本は「主意已定、次日便」に作る。「寄與拜林夢仙仲英」の「仲英」二字、國會本、北大本ともになし。「又囑拜林早日代吟梅完其姻事」の「代」字、三本ともに「替」に作り、「完」字、國會本、北大本ともに「等了」二字に、集成本「等完」二字作る。「過了幾天」の「幾天」二字、三本ともに「數日」二字に作る。

「挹香又帶了幾十兩銀子」の「又」字、國會本、集成本になく、「幾十」は三本ともに「十幾」に顛倒する。「既解情關」の「解」字、集成本のみ「破」字に作る。このほか「置辦了」の「置」は三本ともにそのように作る。

第六十四回 「多是散花苑主座下司花的仙女」の「多」字、北大本のみ「都」字に作り、「的」字は、三本ともに「座下的司花仙女」と場所を變える。「如今塵緣已滿」の「滿」字、三本みな「斷」字に作る。

10 『紅樓夢』方板行、以至亦自此而斬也 二六三——

『大略』寫印本第十六講云、寫伎家情形而暴其奸譎、與青樓夢正相反者有『海上花列傳』計六十四回、題雲閨花也憐儂著、不知出于何時、大約在光緒戊戌之後、或略先于青樓夢也。著者雖自云以「過來人現身說法」、使冶游子弟、發其深省、而尋索隱伏、似亦攻訐怨家之書、其中人物、大都實有、蓋近來假文墨以濟私之先導、而亦上海烟花小說之權輿矣。全書述勾欄情景、著其詭譎反覆之事、而目光終始不

離趙樸齋、幾以趙爲全書線索。趙樸齋者、以訪母舅至滬上、遂游青樓、久而事露被遣歸、娶母妹又至上海、漸々淪落、至拉洋車、後其妹趙二寶乃爲嫗、書盡于此、完否未可知、而作者意在譏趙已甚顯。或云花也憐儂卽松江韓子雲、善奕棋、嗜雅片。旅滬甚久、曾爲報館編輯、習于冶游、故言倡寮事獨切至也。

其書所摘發者、卽「當前媚於西子、背後潑於夜叉、今日密於糟糠、他年毒於蛇蠍。」、然此在字內、本伎家之常情、執以爲罪、蓋責善於非所矣。惟其描寫、頗近眞處、較青樓夢之迂曲、則遠勝之、且記事以通用語、記言以吳語、亦爲後來此類小說所仿效也。

『史略』後記 見本篇7既引。

『史略』各版間の異同 「人數鮮少」の「鮮」字、五十七年版全集までは異體字だが「尠」字に作り、七十三年版全集で改められた。「亦不適于『紅樓夢』筆意」の「適」字、鉛印本では「協」字に作るが、初版以降現行となる。

『小説的歷史的變遷』第六講承本篇8所引云、到光緒中年、又有『海上花列傳』出現、雖然也寫妓女、但不像『青樓

夢」那樣的理想、却以爲妓女有好、有壞、較近于寫實了。一到光緒末年、『九尾龜』之類出、則所寫的妓女都是壞人、狎客也像無賴、與『海上花列傳』又不同。這樣、作者對於妓家的寫法凡三變、先是溢美、中是近真、臨末又溢惡、并且故意誇張、漫罵起來、有幾種還是譏諷詭詐的器具。人情小說底末流至于如此、實在是很有可能以詫異的。

「漢字和拉丁化」『花邊文學』『全集』五云、(前略)但是、我們也不妨自己來試驗、在『動向』上、就已經有過三篇純用土話的文章、胡繩先生看了之後、却以爲還是非土話所寫的文字來得清楚。其實、只要下一番工夫、是無論用甚麼土話寫、都可以懂得的。據我個人的經驗、我們那裏的土話、和蘇州很不同、但一部『海上花列傳』、却教我「足不出戶」的懂了蘇白。先是不懂、硬着頭皮看下去、參照記事、比較對話、後來就都懂了。自然、很困難。這困難的根、我以爲就在漢字。每一個方塊漢字、是都有它的意義的、現在用它來照樣的寫土話、有些是仍用本義的、有些却不過借音、于是我們看下去的時候、就得分析它那幾個是用義、那幾個是借音、慣了不打緊、開手却非常吃力了。(後略)

11 『海上花列傳』今有六十四回、以至(第一回)之約者矣

二六四十二

『史略』各版間の異同 「或謂其人即松江韓子雲」の「謂」字を第三版より第七版は「爲」に作る。「目光始終不離於趙」、合訂再版のみ「不」字の上に「不終」二字を入れるが、これは衍字。「浪游子弟」の「浪游」二字、『大略』鉛印本のみ「浮浪」に作る。

雷瑤「譚瀛室筆記」云、專寫妓院情形之書、以『海上花』爲第一發見。書中均用吳音、如込匱之類、皆有音無字。故以拼音之法成之、在六書爲會意而兼諧聲。唯吳中人讀之、頗合情景、他省人則不盡解也。作者爲松江韓君子雲、韓爲人風流溫藉、善奕棋、兼有阿芙蓉癖。旅居滬上甚久、曾充報館編輯之職、所得筆墨之資、悉揮霍於花叢。閱歷既深、此中狐媚伎倆、洞燭無遺、筆意又足以達之。故雖小說家言、而有伏筆、有反筆、有側筆。語語含蓄、卻又語語尖刻、非細心人不能得此中三昧也。書中人名、大抵皆有所指。熟於同光間上海名流事實者、類能言之。茲姑舉所知者、如齊韻叟爲沈仲馥、史天然爲李木齋、賴頭龜爲勒元俠、方蓬壺爲

袁翔父、一説爲王紫詮、李實夫爲盛樸人、李鶴汀爲盛杏蓀、黎篆鴻爲胡雪岩、王蓮生爲馬眉叔、小柳兒爲楊猴子、高亞白爲李芋仙。以外諸人、苟以類推之、當十得八九、是在讀者之留意也。『小説考證』卷八 一九八四年上海古籍出版社

與胡適書信 240105 云、(前略) 自從『海上繁華夢』出而『海上花』遂名聲頓落、其實『繁華夢』之度量技術、去『海上花』遠甚。此書大有重印之價值、不知亞東書局有意於此否？我前所見、是每星期出二回之原本、上有吳友如派之繪畫、惜現在不可復得矣。迅上一月五日

胡適から『海上花列傳』についての意見を徴されたのか、この手紙では明かでないが、いずれにせよ魯迅のここでの提言が亞東版『海上花』發刊に大きく與かつたことは否定できない。亞東版『海上花』四冊は、新たな知見を織り込んだ胡適の序、それに劉復の序(讀『海上花列傳』)を附して、王原放の標點で一九二六年十二月に刊行された。魯迅はこの手紙でも「每星期出二回之原本」に觸れている。しかしこれには彼のちよつとした記憶違いがあるようである。

所謂「原本」とは『海上奇書』のことで、これは韓子雲つまり韓邦慶が光緒壬辰二月(一八九二)上海で自ら出版した文學雜誌である。胡適の序にあるように、一九二五年の十月末、胡適らと南京に遊んだ鄭振鐸が露店の古本屋から掘り出したものに『海上奇書』の第十四期までの合訂本があった。そこには『海上花列傳』が掲載されていた。胡適は言う。『海上奇書』共出了十四期、『海上花列傳』出到第二十八回。先是每月初一、十五、各出一期的；到第十期以後、改爲每月初一日出一期、直到壬辰(一八九二)十月朔日以後才停刊。」魯迅の思い違いは「每星期」に發行という點にあつたのだが、後に阿英はさらに胡適の敘述を訂して言う。『海上奇書』、是花也憐儂(韓子雲)個人的文學刊物。初刊于光緒壬辰(一八九二)二月一日、同年十一月出到第十五期、以後未見。前十期爲半月刊、後改月刊。胡適謂只出到十四期、誤；魯迅『中國小説史略』、延誤。内容分作三部分、首『太仙漫稿』、次『海上花列傳』、末『臥游集』。(中略)『海上花列傳』、吳語長篇、亦子雲撰、期刊二回、共三十回。後刊單本、全六十四回、并增敘跋。

『晚清戲曲小說目』、曾著錄該書在清末即有六種版本、其間第三種改題『風月寶鑑』、未曾記明。」（一九五八年古典文學出版社『晚清文藝報刊述略』十二頁）『海上奇書』に掲載された『海上花』を十四期二十八回とするのは、鄭振鐸が発掘した現物によつて胡適はそう記し、魯迅は目録の記憶で同じく記したのだから、各々の誤りに直接の關係はない。ただ時間の前後から言つと、胡適と魯迅とは逆轉しなければならぬ。『史略』は胡適の序に據つていないからである。そして半月刊から月刊になった時期について、胡適は「到第十期以後」と言い、阿英は「前十期爲半月刊」（『中國近代文學辭典』一九九三年河南教育出版社も同）とし、さらに全集注は「第九期起、改爲每月一期」（『中國歷代小說辭典』第四卷一九九三年雲南人民出版社はこの説を採る）と述べて三者三様である。現物を見れば簡単に片がつくことだが、こんな些細なこと一つとっても諸説紛々である。この書の日本語譯本には太田辰夫氏の『中國古典文學大系』（昭和四十四年平凡社）本がある。その解説によれば第九期から月刊に變つたとするのが正しいようである。

韓邦慶「海上花列傳例言」云、（前略）全書筆法自謂從『儒林外史』脫化出來、惟穿插藏閃之法則爲從來說部所未有。一波未平、一波又起、或竟接連起十餘波。忽東忽西、忽南忽北、隨手敘來、並無一事完全（部）、並無一絲挂漏。閱之覺其背面無文字處尚有許多文字。雖未明明敘出、而可以意會得之。此穿插之法也。劈空而來、使閱者茫然不解其如何緣故、急欲觀後文、而後文又舍而如他事矣。及他事敘畢、再敘明其緣故、而其緣故仍未盡明、直至全體盡露、乃知前文所敘並無半個閒字。此藏閃之法也。（後略）亞東版右の「例言」は亞東版『海上花』が『海上奇書』より收録したもの的一部である。魯迅が『史略』を起稿した際には直接参照できなかったから、『儒林外史』との類似を看破したのは彼の慧眼であろう。ただ『海上奇書』は魯迅も讀んだことがあり、或いは『儒林外史』への言及が記憶にあつて、それが「略如『儒林外史』、若斷若續、綴爲長篇」という敘述に繋がっているのかもしれない。作者についての知見は、一九二六年に亞東圖書館排印本が出るによつてかなりの事が分かるようになった。胡適

の序が、雷瑑の「懶窩隨筆」等新資料の發掘に努めたからである。しかし韓邦慶について魯迅は『花月痕』の作者魏秀仁ほどには改訂を施してはいない。その理由は未詳。いま胡適序からその主なものを轉錄しておく。

松江顛公（雷瑑）「懶窩隨筆」云、……作者自署爲「花也憐儂」、因當時風氣未開、小說家身價不如今日之尊貴、故不願使世人知真實姓名、特仿元次山「漫郎贅叟」之例、隨意署別號。自來小說家固無不如此也。

按作者之眞姓名爲韓邦慶、字子雲、別號太仙、又自署大山人、卽太仙二字之析字格也。籍隸舊松江府屬之婁縣。本生父韓宗文、字六一、清咸豐戊午（一八五八）科順天榜舉人、素負文譽、官刑部主事。作者自幼隨父宦遊京師、資質極聰慧、讀書別有神悟。及長、南旋、應童試、入婁庠爲諸生。越歲、食廩餼、時年甫二十餘也。屢應秋試、不獲售。嘗一試北闕、仍鎔羽而歸。自此遂淡於功名。爲人瀟灑絕俗、家境雖寒素、然從不重視「阿堵物」、彈琴賦詩、怡如也。尤精於奕、與知友楸枰相對、氣宇閒雅。偶下一子、必精警出人意表。至今松人之談善奕者、猶必數作者爲能品云。

作者常年旅居滬濱、與『申報』主筆錢忻伯、何桂笙諸人暨諸名士互以詩唱酬。亦嘗擔任『申報』撰者、顧性落拓不耐拘束、際偶作論說外、若瑣碎繁冗之編輯、掉頭不屑也。與某校書最暱、常日匿居其粧閣中。興之所至、拾殘紙秃筆、一揮萬言。蓋是書卽屬稿于此時。初爲半月刊、遇朔望發行。每次刊本書一回、餘爲短篇小說及燈謎酒令諧體詩文等。（適按、此語不很確、說詳後。）承印者爲點石齋書局、繪圖甚精、字亦工整明朗。按其體裁、殆卽現今各小說雜誌之先河。惜彼時小說風氣未盡開、購閱者鮮、又以出版屢屢愆期、尤不爲閱者所喜。銷路平平、實由于此。或謂書中純用蘇白、吳儂軟語、他省人未能盡解、以致不爲普通閱者所歡迎、此猶非洞見癥結之論也。（適按、此指「退醒廬筆記」之說。）書共六十四回、印全未久、作者卽赴召玉樓、壽僅三十有九。歿後詩文雜著散失無存、聞者無不惜之。妻嚴氏、生一子、三歲卽夭折、遂無嗣。一女字童芬、嫁聶姓、今亦夫婦雙亡。惟嚴氏現猶健在、年已七十有五、蓋長作者五歲云。……（一九二五年？『申報』「小時報」）

又云、「太仙漫稿」。小說「海上花列傳」之著者韓子雲君、

前已略述其梗概。某君與韓爲文字交、茲又談其軼事云、君小名三慶、及應童試、卽以慶爲名、嗣又改名奇。幼時從同邑蔡蘊雲先生習制舉業、爲詩文聰慧絕倫。入泮時詩題爲「春城無處不飛花」。所作試帖微妙清靈、藝林傳誦。踰年應歲試、文題爲「不可以作巫醫」、通篇係遊戲筆墨、見者驚其用筆之神妙、而深慮不中程式。學使者愛其才、案發、列一等、食餼於庠。君性落拓、年未弱冠、已染煙霞癖。家貧不能傭僕役、惟一婢名雅蘭、朝夕給使令而已。時有父執謝某、官於豫省、知君家況清寒、特函招入幕。在豫數年、主賓相得。某歲秋闈、辭居停、由豫入都、應順天鄉試。時攜有短篇小說及雜作兩冊、署曰「太仙漫稿」。小說筆意略近『聊齋』、而談詭奇誕、又類似莊列之寓言。都中同人皆嘖嘖歎賞、譽爲奇才。是年榜發、不得售、乃鍛羽而歸。君性疏懶、凡有著述、隨手散棄。今此二冊、不知流落何所矣。稿末附有酒令燈謎等雜作、無不俊妙、郡人士至今猶能道之。〔一九二六年四月二十二日『時報』〕

前文によつて胡適は次のように述べる。生卒年の定説としてよいだろう。

據顛公的記載、韓子雲的夫人嚴氏去年（舊曆乙丑）已七十五歲、我們可以推算她生于咸豐辛亥（一八五二）。韓子雲比她少五歲、生于咸豐丙辰。他死時年僅三十九歲、當在光緒甲午（一八九四）。『海上花列傳』初出在光緒壬辰（一八九二）、六十四回本出全時有自序一篇、題「光緒甲午孟春」。作者卽死在這一年、與顛公說的「印全不久、卽赴召玉樓」的話正相符合。以上皆據亞東版『海上花列傳』胡適序引。

12 如述趙樸齋初至上海、以至（第二回）二六四——〇

『大略』寫印本の引用は「王阿二方才罷了……裝做看單條」と「王阿二靠在小村身傍……」以下で、中間「颼颼颼的直吸到底」に作り、『史略』でその後の省略部分は「又燒了一口、小村也吸了。」と省略しない。

『史略』各版間の異同 「耐末脫體哉」の「末」字、訂正版から三十八年版全集まで「未」に誤る。また「一手托兩盒煙膏」の後に省略記號があるが、これは訂正版が誤つて附けたもので、原文はそのまま「踏上樓來」に繋がり、したがって『大略』寫印本から第七版まではむしろその通り

に引用する。現行の版に省略記號があるのは訂正版の誤りをそのまま襲ったもので、原文に従って正すべきである。

また「授于小村」の「于」字、『大略』寫印本から第七版まではすべて「與」に作り、訂正版で「於」字に作る。

『海上花列傳』の版本 『史略』脱稿までいくつかある。

光緒二十年（甲午・一八九四）に點石齋請負で出版された繪入り（各回二圖）石印本が原刊で、ついでその縮印本、所謂小石印本が出、その後は『青樓寶鑑』、『海上百花趣樂演義』、『海上看花記』、『最新海上繁華夢』などと書名を變えた諸本がある。それに民國三年上海重印本（孫目）、鉛印本（亞東版汪氏校讀記）等があり、『史略』成稿に比較的近いのが民國十一年上海清華書局排印本である。そのうち『史略』は書名の變更についてはまったく言及しないので、それらは魯迅目觀書から省いてよいだろう。それから清華書局排印本については、そこに載せられた許廬父の序に言う所と本篇15で述べる趙樸齋に關する傳聞とは必ずしも一致しないので、魯迅がこの版本を見たかどうかは定かではない。『史略』の記述からすれば原刊本を見た可能性も十

分あるが、これまた引用文が全部一致しているわけではないので斷定し難い。したがってある程度は絞られて、小石印本、民國三年上海重印本等がそれかとも考えられるが、現物が見られないので結局特定はできない。『魯迅藏書目錄』には著録はない。『大略』寫印本の引用と鉛印本以後とは少し違うので、同一のテキストに據つたのではないかもしれない。また一九三二年夏北京に歸省した魯迅は、母親の爲に『海上花』四冊を購っている。これはたぶん亞東版であろう。亞東版は前述したように、魯迅はその發起者ではあつても、『史略』定稿には關らない。

いま光緒甲午初刊石印本を影印した古本小説集成本、亞東圖書館排印本、光緒甲午序石印本を底本とした一九八二年人民文學出版社排印本の三本と引用文を對校した。

「說不到四句」、三本は皆「說到不三四句」に作る。

「咕咕唧唧」の「咕咕」、集成本と人民文學版は「躺躺」に作るが、これはおそらく刻工の誤りで、『史略』及び亞東版が正しいと思われる。

「……蹭上樓來」の省略記號、これはすでに述べたよ

うに三本ともない。

「榻牀浪來驪驪□」の「驪驪」を亞東版は「躺躺」に作る。

「授于小村、颺癡癡直吸到底」の「于」を三本ともに「與」に作る。「癡癡」に作るのは集成本、他の二本は「颺颺」に作る。但し三本ともその後ろに副詞であることを示す接尾辭「的」を附けるが、『史略』はこれを落としている。

「痠」、人民文學版は「酸」に作る。

「朦朦朧朧」、集成本、亞東版は上下とも目偏の字に作る。

13 至光緒二十年、以至乃不稍遜于前三十回 二六五—六

『史略』各版間の異同 「則第一至六十回俱出」の「第一」の前に『大略』鉛印本、初版には「自」の字があるが、合訂再版以後にはない。又鉛印本は「六十四回」と正しく作る。初版で「四」が脱落し以後それを襲って現行となるが、ここは當然「四」を補わねばならない。増田涉譯本は

すでに「四」を補っている。そして文末の「前三十回」については、原刊本は上下二函十冊（趙氏「傍證」で出版されたので、律儀に考えれば「前三十二回」とすべき所だろうが、ここは鉛印本からそうなっているので大雑把に概數を述べたと考えてよい。「始來返」は初版から第十一版まで「來始返」に作る。三十八年版全集で鉛印本の舊に戻された、というより校訂で正されたというべきであろう。「而負債至三四千金」の「至」字、鉛印本になく、初版で附加された。

14 有述頼公子賞女優一節、以至（第四十四回）二六六—七
『大略』寫印本も同じ部分を引く。「…文君改裝登場」の次に三本は皆「尙未開口」一句があり、寫印本はそのままと引くが、鉛印本以下みな脱落して現行に及ぶ。加えるべきである。寫印本「一个（頼公子）門客湊趣」と括弧に魯迅の注が入っている。「……將一卷洋錢散放在巴斗内」の「卷」字、それまですべて「捲」字に作ったのが、繁簡通用によって五十七年版全集で「卷」字に改められた。舊

に戻すべきである。また「在」字、三本及び寫印本になく、鉛印本で附加された。「將文君攔人懷中」の「懷」字、合訂再版から第七版まで「場」に誤る。「文君慌的推開立起」の「立起」二字、寫印本から第七版まで「起立」に作り、訂正版で顛倒した。三本ともに「起立」に作るから、「立起」に作るテキストがないならば元に戻すべきだろう。

15 書中人物、以至終末有如『海上花列傳』之平淡而近自然者

二六六—六

『史略』各版間の異同 『大略』鉛印本が「時濟以金」の「金」字を「全」字に作るが、初版以後すべて「金」に作る。また鉛印本には「故當局開篇趙樸齋初見洪卿時」と「局」字があるが、これは衍字で初版で刪る。「耐還有個令妹」の「還」字、鉛印本、初版ではあるが、合訂再版で落ち現行となる。これは三本にもすべてあるので、附加して舊に戻すべきである。

「書中人物、亦多實有」については11に引く「譚瀛室筆記」を參照。

許厘父「海上花列傳序」云、「海上花列傳」……或曰松江韓太癡所著也。韓初業幕、以伉直不合時宜、中年後乃匿身海上、以詩酒自娛。既而病窮、……於是乎有『海上花列傳』之作。

又云、書中趙樸齋以無賴得志、擁貲鉅萬。方墮落時、致鬻其妹於青樓中、作者嘗救濟之云。會其盛時、作者僑居窘苦、向借百金、不可得、故憤而作以譏之也。然觀其所刺褻瑕瑜、常有大於趙某者焉。然此書卒厄於趙、揮鉅金、盡購而焚之。後人畏事、未敢翻刊。……亞東版『海上花』胡適序。

清華書局本は見ることができないので胡適の序に引く所を轉錄した。胡適は許説に續けて魯迅の紹介する説を引いてともに趙樸齋贈賄説を否定する。（亞東版胡適序）許説では二寶が妓女になるのを作者が救うのに對して、魯迅が傳えるのはそのことを具體的に言わない。一方魯迅説では趙の死後のことを言うのに、許説はまったく言わないなど食い違いがあるものの、二説は趙が賄賂によつて『海上花』の刊行を止めさせようとしたことで一致する。魯迅の傳える

説は、出處が未詳だが、許厓父の序によつてそういう噂があつたことは確かめられる。太田氏は日本語譯本（平凡社『中國古典文學大系』）の解説で、趙樸齋が大金をはたいて買収したのは第十五期ではないか、それゆゑ第十五期が稀覯なのではないかと推測する。

魯迅が清末人情小説の末流として作品名を擧げるのは『九尾龜』（小説的歴史的變遷「見本篇10所引」、『海上繁華夢』（與胡適書信240105、見本篇11所引）である。